

## 序

大阪大学 名誉教授 藤元 優子

2021年は、イラン現代文学の起点とされる1921年から百年ということで、イランの国内外でこれを記念する学会やセミナーが開かれました。このような区切りの年に本書が企画されたことはたいへん意義深く、イラン研究者の一人として、心から嬉しく思います。

日本におけるペルシア文学の研究史は、イラン本国や欧米と比較して非常に浅く、研究の層もなかなか厚くなりません。研究の嚆矢となったのは、管見の限り、米国でイラン学を学んだ荒木茂で、1920年にオマル・ハイヤームのルバイヤートをペルシア語から翻訳し（「オムマ、ハヤムと『四行詩』全譯」『中央公論』大正9年10月号）、またその2年後の1922年には古代から中世までの文学を広く扱った『ペルシア文学史考』を著しました。その後、翻訳・研究が少しずつ広がりましたが、対象は古典文学に限られてきたと言っても過言ではなく、それが現代文学にも及んだのは、ようやく1970年代のことです。その上、先達である山田稔先生と中村公則先生は、主に小説に関わってこられたので、現代詩を専門とする鈴木珠里さんと中村菜穂さんは、現代イラン文学研究の第二世代ではありますが、実際には新たなジャンルの開拓者と言うべきでしょう。

鈴木珠里さんは、学生時代からフォルグ・ファッロフザード研究を始め、その後、スィーミン・ベフバハーニーにも深く興味を惹かれるようになって、以来、この二人の女性詩人の研究をライフワークとしてこられたのだと承知しています。本書は、共同研究のテーマである

Home/Homelandが論考の主題となっていますが、イラン現代詩史上に燦然と輝くこの二人の詩人の生涯と詩作について、これほど纏まった紹介がなされたことはなく、その意味でも画期的な講演録です。ほぼ同時代に生まれたとはいえ、家庭環境も選んだ人生も、そして詩風も、ある意味対照的な二人でしたが、それぞれが20世紀のイランで女性として、そして人間として奮闘した足跡を、その作品から読み取ることができます。今回、十分な紙幅を与えられて、重要な作品を翻訳の形で確かめることができるのも、読者にとって嬉しいことです。

一方、中村菜穂さんの「20世紀イラン文学における《閉ざされた場所》について」は、短いながら、コロナ禍の渦中のイランの状況に、人々の内面に深く根を下ろした閉塞感を読み取り、それを土台として過去百年のイラン文学全体を俯瞰するというスケールの大きな発表の記録です。「解放」「自由」「理想」といった正の要素を旗頭に始まったはずの20世紀の文学が、次第に「囚われ」「断絶」「孤独」「抑圧」という負の要素に凌駕されていく、という大きな流れの中にも、「政治・社会」と「個人」、「内」と「外」といった諸条件が複雑に絡み合っていることが、「隔離（ガランティーネ）」をキーワードに説明されています。中でも、負の要素のひとつである「狂気」が、イランの神秘主義的伝統の中で美的な感性と結びついていたという指摘は卓見で、今後、百年どころか、千年を超えるペルシア文学の長い歴史の中に現代文学作品を位置づける際に、外すことのできない視点となることでしょう。